

# 命のらせん階段 次代へ

気仙沼市に、外付け階段が東日本大震災時に多くの人命を救ったことから「命のらせん階段」と象徴的に呼ばれる3階建ての鉄骨ビルが残っている。一帯は津波に襲われたがこの階段を上って避難した約30人が助かった。いま、震災遺構として保存するため、建物を解体せずにそのまま移動させる「曳家」が進む。前例のないプロジエクトに挑むビル所有者と曳家職人の姿を追った。

【神内亜吏

本  
日  
大  
震  
10  
年

## 区画整理対象に

気仙沼市の内の脇地区。更地にぼつんと残るビルの内部には、津波の生々しい爪痕が刻まれている。階段の壁には津波が押し寄せたことを示す海面の黒い線がくっきりと残っていた。

高さ5層超の波が押し寄せたあの日、近隣住民はらせん階段を上り、屋上へ逃れた。足が不自由な高齢者や妊婦も動かし合いながら、手すりを伝った。住民の命をつなぎ留めた

高さが5層超の波が押し寄せたあの日、近隣住民はらせん階段を上り、屋上へ逃れた。足が不自由な高齢者や妊婦も動かし合いながら、手すりを伝った。住民の命をつなぎ留めた

ビルだが、周辺は「復興市民広場」が整備されることに。区画整理の対象となって取り壊しを迫られた。

ビルの所有者は阿部憲子さん58。ビルから南に約60メートル離れた「南三陸ホテル観光」(南三陸町)のおかみだ。1990年完成のビルには震災当時、地元で観光業などを営む「阿部長商店」の創業者で、父の泰児さんが住んでいた。2019年4月に87歳で亡くなったが、震災の教訓を伝えるため、ビルを残してほしい」と願っていたという。

泰児さんは60年のチリ地震津波で被災した経験から、いかに命を守るかを第一に考えていた。ビルに外階段を

## 所有者「頑張る背中見せる」

取り付けたのは東日本大震災の5年前。気仙沼湾に近く周囲に高台のない地区で、住民から「避難所が必要だ」との声が上がっていた。震災発生時、泰児さんも外出先から急いで戻り、屋上へ避難した。

震災遺構は「物言わぬ語り部」といわれる。阿部さんがその重要性を深く考えるようになったのは、震災から1年がたったころ。ホテルを訪れる宿泊客をバスの送迎の際、こんな質問をされるようになった。「ここは初めから更地だったんですか」

標識も目印もない街。かつてあった風景について説明すると、案内を頼まれるようになる。それが「語り部バス」を始めたきっかけだった。従業員が語り部となり、被災した南三陸の街並みを案内するバスツアーは好評を博した。だが、変わりゆく街の姿に、次第に「伝えられなさ」を

用いられる工法だ。油圧ジャッキで建物を浮かせてレベルに載せ、移動させる。

石川さんは15年に、国重要文化財の弘前城(青森県弘前市)の曳家を手がけ、総重量400トの天守を動かした。だが、長い歴史をもつ曳家でも震災遺構を動かした前例はなかった。

「だいぶ傷んでるな」。外観からでも、ビルの損傷は見て取れた。凶面も流されている。泊まり込みで内部を見て回ると、ビルの構造に問題はなかった。あとは持ち上げる。ときに建物耐えられぬか。「出たところ勝負だな」。ビルは約400ト。36台のジャッキを配置し、機械の力で動かしていく。培ってきた経験則を頼りに工程を考えた。

20年7月、曳家を専門とする我妻組(山形県米沢市)の石川憲太郎・工事部長(45)に阿部さんから依頼があった。津波を受けたビルを「限りなく現状のまま」80メートル離れた市有地まで動かすというものであった。ビルがあった場所は復興市民広場となるが、市が隣接する土地を無償で貸し出すことになった。

曳家は、区画整理で建物の場所を移す際に前に迫り、作業は大詰めを迎えている。「震

2月上旬、様子を見に来た阿部さんが「順調ですか」と尋ねると、石川さんは建物を指さし進捗状況を説明した。現在は移設先の目前に迫り、作業は大詰めを迎えている。「震

移設後は震災遺構として整備し、訪れた人たちがビル内部を見学できるようにする計画だ。

阿部さんは今、決意を新たにしている。次世代に「災害があったけれど、助け合っただけだ」と伝えてほしい。大人たちはこうして頑張っているよと背中を見せなければ。それが父から受け取ったバトンだから」



震災遺構として整備するため解体せずに移設する「曳家」が進められている。命のらせん階段Ⅱ2020年11月23日(いずれも気仙沼市で)石川憲太郎さん(左)から曳家作業の進み具合について説明を受ける阿部憲子さん(右) 同年10月14日



2021年3月8日(月)  
毎日新聞



もっと知りたい